
幼稚園になじみにくい子

玉井 収 介

毎年四月がきて、新しい園児たちが入ってくると、その中でひとりやふたりは、親からはなれない、幼稚園になじまない、という子が出てきます。そういう子どものことを少し考えてみましょう。

もちろんひとりひとり特徴があるのでみな同じというわけにはいきませんが、大ざっぱにわけると二つか三つのグループになるようです。

ひとつは、知能のおくれのある場合です。知能のおくれのある子は、百人の中で三人か四人の割合で出るといわれています。だから、全く何の選択もせずに百人の新入園児を迎えれば、その中には必ずいることになります。こういう子が必ず親からはなれないというわけではありませんが、着物の脱ぎ着や、排便のしつけもできないことも少なくないし、新しい環境になれる力も弱いわけです。遊

びの仲間にも入れない、友人もできないというわけで、どうしても園になじめないことがおきがちです。

知能のおくれといってもいろいろな原因があり、おくれ方の程度もまちまちです。原因のことはここではふれないことにして、一般に、おくれ方の程度がひどいほど幼稚園の生活に適應することは困難になります。これは容易に理解できるでしょう。そして、あまりひどければ気の毒ですが、幼稚園をつづけることはあきらめなければならぬこともできます。

知能のおくれ方をあらわす方法に知能年令という方法があります。五才の子で、知能年令四才といえば、普通の子どもの四才ぐらいの知能の程度という意味です。もちろん正常な四才児と全く同じだと考えられるとまちがいなので困るのですが、便利なのでよく用

いられます。

もちろん、こういう知能のおくれた子は学校の生活にも適応できないことは同じです。ですから、学校へ入ることをのばしたり(就学猶予)、あきらめたり、免除したりします。その際、知能年令にしてほぼ一年に当たるおくれがあれば、まず普通に就学することは無理である、猶予した方がよい、とされています。ですから、幼稚園においてもこれに準じたことがいえるわけです。

おくれ方が少なければ、まともに適応できないまでもついていくことはできるかもしれませんが、三年保育などということはどうも無理です。

こういう子どもの場合は、何よりも身辺の生活習慣の自立ということが当面の目標でしょう。身体的に言えば、食事をする事、衣服を脱いだり着たりすること、大小便をすること、洗面や手洗いをすること、などが自分でできるようにすること、といつてよいでしょう。これは、いわば集団生活に参加するための基礎条件だと思います。それをヌキにしていきなり集団の中へ入ることは到底できません。ですから、さっきのべた知能程度とともに、こういう基本的な生活習慣の自立の程度も、幼稚園をつづけるかあきらめるかの判断をする目じるしになります。

その上で、通園をつづけるとなつたらまず生活習慣の自立が目標

になるでしょう。つづけるかどうかの判断には専門機関に相談してみるのもよいでしょう。

もうひとつのグループは、身体の病気や知能のおくれはないのに通園をいやがる子どもです。こういう子どもは学校に行く年令にもあられます。学校恐怖症、などという名前であれば、最近非常に増えてきているようで、いろいろな方面で注目をあびています。しばらくこれについてのべてみましょう。

身体も知能もわるくない、家庭の無理解や貧困のため働らいていゝる、などの事情もないというのに登校しない、というのがこの種の子どもですが、さりとて、学校をさぼつてあそびまわっているというのでもありません。そういう非行少年に近い形の登校拒否は以前からありました。もちろん、この非行型の怠学は、かなり年令の高い子にみられるもので、幼稚園にはまずありえないことです。

こういう怠学型と、恐怖症型とのちがいは、前者は、学校こそいけないがそれ以外の場所へは出入りするし仲間ももっているのに対し、後者は、学校のみならず外の世界には単独ではどこにも適応できないというところにあります。子どもの性格も前者は行動的で活発、外向的ですが、後者は、内向的、小心、内弁慶、などという傾

向がみられます。そして、家庭の養育態度も前者は一般に放任的、後者は過保護的、というふうに対照的です。もちろんこれは大体の傾向で中間的な例も、例外的な例もあります。

ですから、ここで問題になるのは当然この後者の方です。

ところが、この後者の仲間にも一概にはいえないものがあるようです。ややっこしいですがもう少し進めていきましょう。早くいえば、はじめから学校にいかれない子どもと、ある時期まで無事についていたのに、途中から行かなくなってくるものです。これを第一群、第二群とよびわけることによみましょう。

この第一群というのは、また分離不安群ともよばれます。親からわかれることへの不安、子どもをはなすことへの不安が子どもと親の双方にあって、互いに結びつき、依存しあっているために、学校に行かれないということになってくるものです。いいかえれば、親からはなれて単独で生活しなければならぬ場所に適應することを拒んで、家庭に逃げてきてしまうというわけです。ですから大部分は低い年齢でおこります。そして、逆に、親がついていけば登校する、という場合もあります。

第二群の方は、むしろ高学年ではじまることが多いものです。それまでは無事に通学していて、成績などもむしろ上位にすることが多いものです。そして、何かのきっかけで、たとえば学級委員にえ

らばれたことが重荷になったとか、成績が下ったことを気にするか、何か心理的に負担になることが生じてきたとき、休みはじめてしまうものです。この群の子どもたちは、学校へ行かなければならないという気持ちはつよくもっています。それが行かれないのですから、休んでいること自身がイライラするものになります。それで、友だちが登校している時間は外出もしません。散髪やフロも夜になっていったりします。夕方は、宿題を友だちからきいてやって、あすの準備をするのですが、あさになるとダメなのです。自分でも不安なので腹がいたいだのという口実をもうけてみたり、イライラして家のものに当たりちらしたりします。ですから、学校恐怖症、という名前でもぶとしたり、この仲間がもっともそれにふさわしいものでしょう。第一群はこれにくらべると、自分が行かなければならないという自覚が乏しいので、休んでもよい、ということになると案外平気でうちにいるものです。ですから、学校恐怖という名前はちょっとふさわしくありません。

しかし、もうこれでおわかりのように、この第二群型のものは幼稚園児にはみられません。逆に、この一群型の方は幼稚園のころでもよくみられます。

ですから、ここでは、もう少しこれについてほり下げておきます

よう。

さっきものべたことからわかるように、この仲間では、親の態度がひどく過保護、溺愛という傾向があります。

一人っ子とか、病気をしたとか、いろいろな理由はあつてあつて、ともかく甘やかされ、大事にされて、子どもなりに、外の世界に適應することをおぼえる機会がなかつた、とでもいえばよいでしょう。遊園地やデパートに出かけていった経験はあつても、それはみなつれていってもらったという形であつて、自分でしたという経験がないのです。

ひどい例になりますと、何かきいてもおかあさんの顔をみるだけ、という子もいます。親がかわつてこたえてくれるのが習慣になつてゐるのです。

おもしろいことに、親の方も子どもをはなしたがらないのです。ある例では、相談にきて、親とはなしてフレイルームに入れようとする、親の方がついてきてしまう。外でまっついて下さいといふと、ちょっと出ていくが、帽子をどうするとか、ハナをかむとかいって入つてきてしまうというのもありました。またある例では、学校へついでいって、側にすわつてゐるので、先生がかえつてほしいといつたところ、やつとかえるようになった。しかし、そのうしろで、子どもが、ワツと声を出して泣き出すと、ホツとした、といふ

母親もいます。つまり泣いてくれないとそのまま帰つてこなければならぬのが母親にもさみしいのです。

またある例では、入学して半年たつても、また母親が教室の外の廊下に立つていて、子どもは席にもつかず、その廊下側の教室のすみに立つて、カベひとつをへだてて向きあつたまま一日中立つてゐるなどというのもあります。

このような重い例になると、ほとんど全部が幼稚園に行つていません。行きかけても、同じことがおこつて行けないのです。学校よりもっと幼いときなのですから、ムリはありません。そして、幼稚園は義務制ではないということ、たいていは、やめてしまふのです。そしてそのまま家の中にいる。親もふしぎとは思われない。そして学校へいくころになつたら何とかいくだろうなどと樂觀的にかゝがえてゐるのです。ところが、そうしてゐるかぎり、子どもの社会性、自立性は伸びません。ほかの子は幼稚園の生活を経験して社会性をのばしてゐるのですから、その差はひどくなります。そして、学校は当然行かれない。しかし、こんどは義務制ですからやめてしまふわけにはいかない。そこでやつと相談所へまわされてくる、といった経過をたどるのです。

ですから、なおすとすれば幼稚園の時期の方がまだしもやさしか

ったのだ、ともいえるでしょう。

もちろん、こういう子どもにいろいろな程度があります。ですから、幼稚園入園の当初にみられるはなれない、なじまない、という子どもの中にも、将来ここまで発展してしまうようなものもあれば、一月、二月何とかしてつづけているうちに、やがて一人でいられるようになるものもあります。なるべくはそうしたいものです。やめて引きこんでしまうと将来もっとむずかしくなるのです。

さて、そのために、どんなことに心がけたらいいかを一つ二つあげておきましょう。

まず何としても幼稚園に行くことが大切です。親がついてくるのも止むを得ないかもしれませんが、ともかく、親がついている、という安心感を与えて、その中で、幼稚園の生活を、とけこめないまでも、みているという経験をする必要があります。

もちろんそれが当たり前にならないために、ある時期には、はなれてもらわなければなりません。そのときは、はっきり子どもにそれを告げることが必要です。だまって帰ってしまうというのはもともとよくないことでしょう。ある時期がきてからなら子どもがいやがって、少し無理をしても帰ってもらうことは必要でしょう。

少しかわいそうのようですが、ある時は、いやなことでも、おもしろくないことでも、しなければならぬことはするという経験というものが、人間の社会に適応していくためには必要なのです。

大げさにいうと、課題意識とでもいうのでしょうか。そのほんのきざしのようなものが幼稚園の生活にもあるのです。幼稚園の生活が子どもにとってすべておもしろい、たのしいことばかりであるはずはありませんし、その必要もありません。がまんしなければならぬことはそこにもあつてよいのです。

ですから、幼稚園の生活がどんなのかをみとどけるまでではないにしても、幼稚園の生活がよい。そして、ついてもらっても、毎朝きまつた時間にはうちを出る。ということが身につくまでは、親と一緒にいるのも意味がある。それ以後ははなす方がよいということになるでしょう。

こういう子の場合には、親の方に、はなしたがらない傾向があるということに注意していただきたいと思います。

それから、この場合も、前述の知能のおくれた子のとくと同じように、基本的習慣の自立もおくれていることが多いのです。そんなときは、やはりその自立がまず目標になることは同じでしょう。

(国立精神衛生研究所)